2020年11月29日　久宝教会　待降節 第1主日礼拝

メッセージ「闇は深まり、朝は近づく」　　牛田匡牧師

聖書　ローマの信徒への手紙　13章8－14節

11月も末となり、日に日に寒さが増し、日も短くなってきました。ニュースを見ても、新型コロナウイルスの感染拡大は増加の一途を辿っています。大阪府では、感染者の増加に合わせて、重症病床使用率も増えて、「爆発的感染拡大」の状況に迫って来ていると言われています。数字を見ますと、今年の春、緊急事態宣言が出されていた頃よりも、明らかに深刻な状況となっていますが、もう「あんな制限された生活は出来ない」ということなのか、「保障はしたくない」ということなのか、人々の行動制限は行われず、あくまでも個々人の判断による自粛、自衛の自助、に任されています。その一方では、PCR検査を受けたくても、なかなか受けられないという実態もあるようで、「自分自身もいつ感染するかもしれない」、また「無症状感染状態でいつ他人に感染させるかもしれない」という心配がなくなりません。

世界を見回すと、カナダのトロントでは、感染の拡大を受けて、先週から再び「ロックダウン」が行われているそうです。隣のアメリカでは、トランプ大統領がずっと「コロナはただの風邪だから、恐れる必要はない」と言い続けて来ていますし、サンクスギビング（感謝祭）の休暇を故郷で親戚一同が集まって過ごす時期ということもあって、感染拡大に一向に歯止めがかからないようです。

しかし、それは日本でも決して対岸の火事ではない話です。それこそ、不安が長引けば長引くほど、「現実を見たくなくなる」と言いますか、「ただの風邪と同じようなものだ」と言って、安心したくなる気持ちも、多くの人の中にあるように思います。同時に、そのような「長い物には巻かれろ」という大衆心理は、ファシズムの入り口に来ていることでもあります。ですから、そのことを思うと、これからコロナ不況の影響で、格差と分断はますます強まっていくでしょうから、その中で、くれぐれも道を誤ることがないように、注視していかねばならないと思わされています。

ところで、昨日は、久宝まぶねこども園と愛和保育園のクリスマス礼拝でした。私は久宝まぶねこども園に参りましたが、ホールに集まる人数を制限して、クラスごとに 4 部制で行いました。子どもたちも先生方も保護者の方々も、初めての対応でしたが、様々な工夫をしながら行いました。このコロナ禍の中、私たちが今年もクリスマスを迎える意味とは何なのか。待降節（アドベント）に入った今、改めてそのことを考えさせられています。『ヨハネによる福音書』によると、イエス・キリストの誕生とは、闇の中で輝く光だったと書かれています(1:5)。今日からアドベントが始まり、クランツのろうそくに灯が灯されました。しかし、それとは対照的に、今、世界はコロナ禍の中、明るい希望を抱きにくい時代になっています。そんな中、私たちは一体どのようにしていったらよいのでしょうか。そのことを、今日も聖書に聞いていきたいと思います。

今回の聖書の箇所は、パウロによる「最も重要な掟」とも呼べるような箇所でした。「最も重要な掟」と言うと、マタイ・マルコ・ルカの 3 つの共観福音書には、イエス様の言葉として「心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」と「隣人を自分のように愛しなさい」（マタイ 22：34－40）という二つの掟が、挙げられていますが、パウロの場合は「人を愛しなさい」の一つです。

8 節からですが、「互いに愛し合うことのほかは、誰に対しても借りがあってはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです」。ここで言う「借り」とは、負債のことですから、返すべきもの、する必要のあること、という意味です。「お互いに大切にし合う」ということ、それ以外にするべき事は何もない。他人に対して負っていることは何もない、と言い切っています。何故ならそれによって「律法を全うしている」から。全て満たしてしまう、全てを守ったことになるからだ、というわけです。9 節にある「姦淫するな、殺すな、盗むな、貪るな」というのは、モーセの十戒の中から四つの戒めを例として挙げていますが、パウロはそれらに加えて、十戒の残りの六つを挙げることもせず、「その他どんな戒めがあっても、『隣人を自分のように愛しなさい』という言葉に要約されます」と断言しています。何故なら「愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うする」（10）からです。

このパウロの言葉は分かりやすいものですが、しかし、共観福音書でイエス様は「神を敬い、隣人を愛しなさい」と「二つの掟」を言っているのに、パウロは後者の一つしか言っていません。そのため、もしかすると「本当にそれだけでいいのか」と心配になるかもしれません。しかし、イエス様の言葉としても、共観福音書ではなく『ヨハネによる福音書』では、「互いに愛し合いなさい。これが私の命令である」（15：17）とだけ述べられています。パウロがこの『ローマの信徒への手紙』を書いたのは、マタイ・マルコ・ルカの 3 つの共観福音書が執筆されるよりも早い時期でした。ですから、イエス様が伝えた教え、イエス様が身をもって示された価値観を受け継いだ人々の中には、「最も重要な二つの掟」という理解と、「最も重要な一つの掟」という理解との両方があったのでしょう。ですが、私たちは「人を介して神と出会う」わけですし、パウロが言うように「人を愛する者は、律法を全うしている」ということを考えると、イエス様が伝えた掟は一つか二つかということは、もはや重要なことではなくなるのではないでしょうか。

続く 11 節以降は、「今がチャンス」「今こそ生き方を改める時だ」と言われています。「あなたがたは、今がどんな時であるかを知っています」……。「既に知っている」と完了形で書かれていますが、それはどんな時か。それは 12 節にあるように「夜は更け、昼が近づいた」。夜の闇は深くなったが、その分だけ日も近づいた、朝が近付いた。眠りから覚める時が既に来ている、というわけです。今は夜の暗闇の中にいても、もう朝の光、夜明けは近づいてきている。闇の中での生き方は白日の下にさらされようとしている。だから今こそ「隣人を大切にする生き方をしよう」、そのように記されています。

また 14 節では「主イエス・キリストを着なさい」と言われていますが、これは 12 節の「闇の行いを脱ぎ捨て、光の武具を身に着けましょう」と併せて、「そのような生き方をする」ということのパウロ流の表現でしょう。服を着るように、自分の身に着けることで、イエス・キリストの価値観を身に帯びて、イエス様と一体のものとなる、ということです。今はもうその時、眠りから目覚める時、イエス様と共にあって、隣人を大切にする生き方を実践して行く時だ、と言われています。

「闇は深まり、朝は近づく」……。また別の言葉で言うならば「冬来たりなば、春遠からじ」や、「明けない夜、止まない雨はない」もそうでしょうか……。今はたとえ辛く、しんどい状況にあっても、その苦難はいずれ必ず抜けて、幸せな状況が来るから今は忍耐して辛抱しよう、というようなこれらの言葉は、苦難の中にある人を励ますものですが、しかし、同時にまた過度に我慢を強要したり、安易に目の前に見える「偽の安心」に飛びつかせてしまったりする心配もあります。「コロナはただの風邪だ」というのも、「ワクチンが出来れば大丈夫だ」というのもそうではないでしょうか。

私たちはいつ何が起こるかを知ることは出来ません。災害も病気も事故もそうです。だからこそ、「いつも目を覚ましていなさい」と言われています。「やがて来るいつか」ではなく、今がその時です。隣の人を大切にするのは今日からだよ、聖書はそう言っています。「私に従いなさい」「私と共に歩みなさい」と言われるイエス様が、私たちに求められているのは、有名になることでも、お金持ちになることでもありません。ただ目の前にいる人、隣にいる人を今、大切にすることです。そのことは子どもにもお年寄りにも誰にでもできるはずのことです。しかし、現実にはその簡単な事が出来ていない自分自身がいます……。イエス・キリストを身に着けた、イエス様と一体になった者として、隣の人を大切にする生き方へと、導かれて行きたいと願います。

今年のクリスマスは、いつものような明るく楽しいクリスマスではないかもしれません。それこそ身近な人たちが病気にかかって、重症化しないとも限りません。そのように考えると、多くの不安や心配があります。しかし、思い返してみると、約 2000 年前の最初のクリスマスも、不安と暗闇の中に灯った小さな出来事でした。この世界を創られた目に見えない神様が、目に見える姿となった生まれたクリスマス。それは旅の途中の難民の、正式な結婚を経ない妊娠で、周囲から歓迎されない出産による誕生でした。そのような小さく低くされた所に、神の子は生まれました。そのことは、今日の私たちにどんな意味を持っているでしょうか。今日から始まるアドベントの期間、私たちは改めてそのことに向き合っていきたいと思っています。